様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：２７４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１２２５

研究課題名（和文）古典の中の環境と子ども―〈困難を克服する子ども物語〉の教材化に向けた臨床的研究―

研究課題名（英文）Children and Environment in Japanese classical literature: Clinical research to compile "Stories of children who overcome hardships" as teaching material

研究代表者
中井　賢一（NAKAI, Kenichi）

熊本県立大学・文学部・准教授

研究者番号：９０５８０９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、「学習者の多読を促進できる教材の不足が古文離れの一因である」との現状認識のもと、学習者が自身を重ねやすく、且つ、未来に向けた規範にしやすい物語を集成したリーディング教材を高校現場向けに作成し、多読環境の整備に資することにある。
　そこで、本研究においては、学習者自身が様々な「環境」との関わり方に思いを致せるような〈困難を克服する子ども物語〉を、新資料も含め、報告者自身が指導効果を臨床的に検証した上で教材化した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to compile reading materials for high school students consisting of stories that help students to identify with the characters and provide them with future positive models in order to create a better-equipped educational setting for extensive reading, based on the present recognition that one of the reasons for decreasing interest in classical literature is shortage of reading materials which facilitate learners to read extensively.
 In this study I attempt to produce educational materials using “Stories of children who overcome hardships” which encourage learners to think about their relationships to various environments. The effectiveness in teaching with the stories chosen has been verified clinically.

研究分野：日本古典文学

キーワード：日本古典文学　国語科教育学　教材開発　多読　サイドリーダー　学校現場へのフィードバック

１．研究開始当初の背景

(1)新学習指導要領が、伝統的言語文化の重視を打ち出したが、これは高校における「古文離れ」の深刻さを如実に語る徴表でもあろう。サブカルチャーなどを利用し学習者の関心を高める実践は多いが、それが有効なのは概ね導入期に限られるし、また、古文自体を体系的に多読させ得ているわけでもない。それゆえ、継続的に古文そのものを多く読ませる工夫や、古文そのものにある魅力的な内容に目を向けさせる仕掛けが必要であると考えた。

(2)近年増加する大災害をはじめ日本に固有の地理的条件（＝自然環境）の中で、人がいかに生きていくかという問題、あるいは、情報化・都市化に伴い希薄になる人間関係（＝人間環境）の中で、いかに他者と関わり社会を形成していくかという問題には、学習者一人ひとりが真摯に向き合わねばならないし、指導者としても未来に向けた何らかの展望を持たせたい。いわば、様々な「環境」への具体的対し方を学ばせるための教材が必要であると考えた。

(3)プレスタディを通じて、(2)に触れた「『環境』への具体的対し方」について、特に災害も政治的動乱も頻発した平安～室町期の物語作品に、関係の描写が数多く存在するという分析結果を得ていた。

(4)報告者は、16 年間の高校教員経験より、学習者は、たとえ文学史上有名な作品であっても、そのことだけで関心を持つわけではなく、学習者たちが、自身にもあり得るとして作中人物の肩を持てるか、いわば、心的距離の近い物語か否かが重要であり、そのような教材に対しては、主体的に理解に努める傾向にあるとの分析結果を得ていた。

以上(1)～(4)より、申請者は、「環境」との関わり方を描き、且つ、学習者に「心的距離の近い」物語を集成し、多読しやすいリーディング教材を編むことを着想するに至った。具体的には、厳しい「自然環境」と「人間環境」の中で、それに負けずに成長していく子ども像、いわば〈困難を克服する子ども物語〉を軸に、短篇集形式のサイドリーダーを編む。このような軸があれば、自己投影が容易になるだけでなく、学習者自身が〈困難を克服する〉意欲や展望を学び取ることも期待できる。また、短篇集的サイドリーダーであれば、検定教科書の優れた有用性は変わらず享受しつつ、平行して検定教科書には掲載されない様々な作品を幅広く読むことが容易となると考えた次第である。

２．研究の目的

本研究の目的は、「学習者の多読を促進できる教材の不足が『古文離れ』の一因である」との現状認識のもと、学習者が自身を重ね合わせやすい（＝心的距離の近い）物語、且つ、学習者が未来に向けた規範にしやすい（＝成長への意欲を喚起する）物語を集成したリーディング教材を高校現場向けに作成し、古文の多読を促す指導環境を整備することにある。

教材のキーワードは〈困難を克服する子ども物語〉とし、新資料も含めた多くの物語作品から、厳しい「自然環境」や「人間環境」に打ち克ち成長する子ども像を抽出し編集する。教材化に際しては、出来る限り報告者自身が学習者への指導を通じ臨床的に有効性を検証した上で、冊子媒体、及び電子媒体の形態で高校・高専現場向けに公開できるよう作業を進めた。

３．研究の方法

(1)厳しい「自然環境」や「人間環境」の中で〈困難を克服する子ども物語〉を、新資料も含め、平安期～室町期を中心とした様々な時代から多く集成する。

(2)それらの教材価値を申請者自身が勤務校における授業実践を通じて検証した上で、テキスト・注釈・指導例等から成る教材を編集作成する。

(1)(2)については、平安期の物語作品について前記「目的」に沿って教材化を進め、平行して鎌倉・室町期（一部江戸期も含む）物語の資料収集を行う１年目、引き続き鎌倉・室町期物語を中心に資料収集とその具体的な教材化を行う２年目、そして、ここまでの成果の再検証と発信を行う３年目、と大きく研究期間を区分して行った。

本研究において、特に留意したのは、鎌倉・室町期物語の扱い方であった。鎌倉・室町期の物語といえば、検定教科書では軍記物語が採用されることが多いのであるが、本研究においては、子どもが死や戦と関わるストーリーは、教育的見地からできる限り避けることとした。また、活字テキスト化されていない作品や、室町期成立か江戸期成立かが不分明な作品も多いのであるが、本教材の個性や新奇性を高める効果に鑑み、それらの中からも適切に抽出できるよう配慮した。

なお、鎌倉・室町期の物語には、学会における評価の定まっていないものも多く、その内容、質ともに、玉石混淆とも言うべき現状であるため、高校の古文教材として適切であるか否か、教育学的見地からの検証も行った。検定教科書には掲載されにくい作品を多く取り上げるからこそ重要なステップであると考え、申請者自身の判断のみに頼るのでなく、有識者の専門的知見の提供を受けつつ慎重に作業を進めた。

本研究の遂行に際しては、「多読」の目的に鑑み、載録教材の質・量の担保が何より優先されるべきと判断されたため、拙速に陥る

ことなく、常に研究の進捗状況に即し、計画全体を柔軟に見直しながら、着実に成果を積み上げていくよう心掛けた。
　また、教材の作成に際しては、編集作業が未完了の段階でデータの紛失・流出等があれば、各方面に多大な迷惑をかけることになるため、そのような事態を未然に防ぐべく、データ編集にはスタンドアローンのＰＣを用い、セキュリティロックを施した上で、外部へのデータ持ち出しは一切行わないよう留意した。

４．研究成果
(1)研究の主な成果
　「古文離れ」が、近時特有の問題でないにもかかわらず、今回、新学習指導要領が敢えて古典重視を強く打ち出しているのは、これまでそれに対する有効な方法論や具体的な教材の整備が十分になされてこなかったことを物語っていよう。本研究は、〈困難を克服する子ども物語〉というキーワードのもと、教材を学習者にとって「心的距離の近い」ものに変えること、いわば教材自体を学習者に歩み寄らせることで古文そのものを多読させる仕掛けとする点が大きな特色である。同時に、その教材を多読することで、古文の理解力が高まるだけでなく、「環境」との関わりについて考えたり、また自身の〈困難を克服する〉意欲を奮い立たせたりする契機が、必然的に学習者に多く保証される点が、教育的効果の観点から見ても特徴的であると考えられる。
　具体的には、「厳しい自然環境を克服する物語」として、うつほ物語、浜松中納言物語、山路の露、松陰中納言、岩屋の草子、古巣物語について抽出した各場面、また「厳しい人間環境を克服する物語」として、落窪物語、源氏物語、とりかへばや、風につれなき、山路の露、八重葎、雲隠六帖、松陰中納言、兵部卿物語、岩屋の草子、古巣物語について抽出した各場面がそれぞれ該当し、いずれも当該場面の本文・注釈と現代語訳・指導例等と併せ、教材化できた。
　以下に本研究の成果として取りまとめた教材、兼、本研究全体の報告書の【目次】と【凡例】を掲げ、その上で教材内容について一例を示しつつ説明する。なお、この「教材、兼、報告書」は、高校現場への配布用冊子として、また、現在整備中の公開用電子データの元データとしても利用するものである。

「古典の中の環境と子ども―〈困難を克服する子ども物語〉の教材化に向けた臨床的研究―」報告書
【目次】
《教材篇》
1.うつほ物語
2.落窪物語
3.源氏物語
4.浜松中納言物語
5.とりかへばや
6.風につれなき
7.山路の露
8.八重葎
9.雲隠六帖
10.松陰中納言
11.兵部卿物語
12.岩屋の草子
13.古巣物語
《論文篇》
1.うつほ物語の教材価値
2.落窪物語の教材価値
3.源氏物語明石中宮論
4.浜松中納言物語の教材価値
5.（参考）高等学校古典『方丈記』の扱い方

【凡例】
①作品の特徴
②使用テキストと底本
③引用【場面】に登場する〈子ども〉
④引用【場面】の概要
⑤読み取らせたい事項・単元テーマ
⑥授業に投げ込む場合の留意点・指導の方法
⑦【場面】本文・現代語訳
⑧補論（まとめて「論文篇」に掲げる）
以上

《教材篇》「1.うつほ物語」を例に教材内容について簡単に説明する。
　まず、①として、当該作品の注目すべき特徴について概説した。例えば、「うつほ物語は、二十巻に及ぶ日本最古の長篇物語作品である。平安中期成立と思われる。複数の首巻を有し、物語の長篇化の過程を窺わせる資料としても貴重である。奇瑞を導く秘琴伝授と、あて宮求婚譚に関わる藤原氏と源氏の権力闘争とを、大きな軸として展開していく。作者を源順とする説もある。…」のように、文学史的特徴の観点のみならず、表現や内容構成、人物造型や全体構造等、作品論的特徴の観点からも、指導者・学習者に注意してほしい事項について触れるように心掛けた。
　次に②として、本文の依拠する底本について掲げた。小学館『新大系』本の場合、底本は「尊経閣文庫蔵前田家本」であり、その特徴とともに明示した。特に古典文学作品の場合、写本によって本文の叙述に異同があり、場合によっては写本間で人物造型が大きく異なることもある。古典と呼ばれる物語作品が、多くそのような状況の中で成立・享受されていく事情について、学習者に早期に意識させたいと考えたためである。
　次に③として、「藤原仲忠」のごとく、教材として取り上げる場面の主人公を明示した。
　続いて④として、教材化した具体的な物語場面を概括的に列挙した。例えば、「【場面Ａ】＝草木を食べ木皮を纏わねばならない苛烈な自然環境の中、母俊蔭女によって、仲忠への秘琴伝授が始められる。【場面Ｂ】＝仲忠

は、過酷な生育環境にあって、母に勝るほど完璧に秘琴を習得する。【場面Ｃ】＝秘琴の優れた音色によって、父右大将との邂逅が実現する。…」のようにであるが、その際、極力、場面全体のアウトラインがイメージできるような情報を組み込むよう配慮した。

次に⑤として、それら物語場面の読解を通じて、是非とも学習者に読み取らせたい事項や指導すべきテーマについてキーワード化・キーセンテンス化して掲げた。例えば、「苛烈な自然環境の克服。真摯な学習姿勢とそれによる優れた成果。」のごとくである。これは、いわば指導者が学習者に向けて発信すべき内容の「柱」と位置付けられる。それらの多くは、報告者自身が勤務校における指導実践を通して得たものである。

次に⑥として、指導上の留意点と具体的指導方法の例について掲げた。例えば次の通りである。「秘琴に関わる音楽奇瑞譚を含むゆえ、伝奇物語とされる『竹取物語』の後に扱うことが望ましいだろう。通史的に物語文学史の流れを押さえていることは必須であると思われる。（―中略―）学習者が、それぞれに抱える困難さに思いを致した上で、それでもその克服に向けて一途に学習に励む契機とできるよう配慮したい。学習者が、自身と「仲忠」とを重ね合わせて考えるような学習活動が必須である。国語表現領域へと展開するのが効果的であろう。（―後略―）」。この⑥の項目についても、⑤と同様、多く報告者自身が臨床的に検証していく過程で着想したものである。なお、この⑥の項目については、指導者向けのガイドラインとしてあることを想定しており、学習者への提示は特段必要ではないと思われる。

次に⑦として、具体的物語場面の本文と、注釈と共に私に施した現代語訳の例を掲げた。現代語訳に際しては、有職故実をはじめ、登場人物の官職や補任等に関する情報についても注釈に盛り込むよう工夫した。また、高校の古文指導の現状に鑑み、出来る限り文法事項を素直に反映させた直訳となるよう心掛けた。具体的には以下のごとくである。

【場面Ａ】

（俊蔭女は、若小君（＝時の太政大臣の子。太政大臣は太政官の長であり官僚機構のトップである。）の子である若小君との一夜の邂逅の結果、仲忠を生む。父俊蔭の死後、零落した俊蔭女と仲忠は、都を離れ、熊から譲られた北山のうつほで木の実を食べながら生活していたが、ある日、俊蔭女は、父から授けられた秘琴の奏法を仲忠に伝授しようとする。）

「今は暇あめるを、おのが親（俊蔭）の、かしこきことに思ひて教へたまひし琴、習はしきこえむ。弾きみたまへ」と（俊蔭女は）いひて、りうかく風をばこの子（仲忠）の琴にし、ほそををばわれ弾きて習はすに、聡くかしこく弾くこと限りなし。人気もせず、獣、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、たまたま聞きつくる獣、ただこのあたりに集まりて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、尾一つ越えて、いかめしき牝猿、子ども多く引き連れて聞く。…　　（俊蔭巻八〇～八一頁）

〈訳〉「今は暇があるようなので、私の父俊蔭が、重要なことだと思って私に教えなさった琴を、あなたに習得させ申し上げましょう。弾いてみなされ」と、俊蔭女は言って、りゅうかく風をこの子仲忠の琴にし、ほそお風を自分が弾いて習わせると、仲忠は利発で立派に弾くことこの上ない。他に人気もなく、獣も熊や狼でないものはやっても来ない山で、このようにすばらしい演奏をしていると、たまたま聞きつけた獣は、ただただこの周辺に集まって、憐憫の心をもよおして、草木もなびくなかに、尾根を一つ越えて、大きな牝猿が、子どもを多く引き連れて琴を聴く。…

以下、同様に【場面Ｂ】【場面Ｃ】…と続く。

最後に⑧として、「うつほ物語」各場面を教材として選定した背景となる私の考え方について、補論の形式で掲げた。【目次】《論文篇》に補論として挙げた五本の拙稿は、いずれも本研究の推進を思想的に支えたものであり、学会誌をはじめとする学術研究誌に掲載されたものである。「5.（参考）高等学校古典『方丈記』の扱い方」以外は、全て本研究期間内の成果であり、後掲「主な発表論文等」の欄に「①②③⑤」として掲げてある。同欄の「④」は「5.（参考）高等学校古典『方丈記』の扱い方」を元にしたものであるが、紙幅の都合で大幅に省略・圧縮してあるため、《論文篇》には敢えて載せていない。

以下に《論文篇》に掲載した各論考について、その概要を記しておく。

1. うつほ物語の教材価値…苛烈な環境に打ち克つ仲忠のありかたと、うつほ物語が、いわゆる「安定教材」と同じ要素を含み持つという表現上、構造上の事実とに注目し、この物語を高校教材として取り上げるべきことを論じた。
2. 落窪物語の教材価値…落窪物語を「才覚によっていじめを克服する物語」、「読み手と物語世界との距離が近い物語」と再定位し、主題、表現の両面から中高の教材に有用であることを論じた。
3. 源氏物語明石中宮論…都に対峙的権力機構を並行させるよう幼少時より一貫して働く明石中宮の機能と、それによって宇治の物語世界が都の政治世界と繋がる仕組みについて論じた。
4. 浜松中納言物語の教材価値…浜松中納言物語が、親子相互の情愛を大きな主題としている点を明らかにし、その主題性ゆえ学校教育において有用な教材となり得ることを論じた。

5.（参考）高等学校古典『方丈記』の扱い方…方丈記冒頭「ゆく河の流れ」の主題性を「無常」と概括する従来の指導傾向に疑義を呈し、その上で、本文の表現徴表に基づき詳細に主題認定を行う方法について教育学的観点から論じた。

最後に、本教材の《教材篇》に取り上げた全ての物語について、【凡例】の「⑤読み取らせたい事項・単元テーマ」について、以下に順に掲げておく。報告者がいかなる物語場面を重視したか、いかなる事項を学習者に伝えるべきと判断したか、本教材編集にかかる思想やスタンスを象徴的に示していると考えるからである。

1.うつほ物語…苛烈な自然環境の克服。真摯な学習姿勢とそれによる優れた成果。
2.落窪物語…いやがらせにも動じない寛大な心。困難を乗り越える契機としての才能・才覚。
3.源氏物語…甘えが許されない人間環境の中でも耐え抜く芯の強さ。厳しさに絶えた成果としての栄華。
4.浜松中納言物語…困難を乗り越える力としての親子愛。意志を貫く強い信念。
5.とりかへばや…個性の尊重。特異な個性を許容する親の愛。
6.風につれなき…約束を守る強い意志。主体的判断と信念。
7.山路の露…厳しい自然環境に耐え、仏道に専心する姿勢。迷いを振り払う心の強さ。主体的に進路を選択する堅い意志。
8.八重葎…親子愛。意志を貫く強い信念。
9.雲隠六帖…深い親子愛と兄妹愛。悲しみを振り払う心の強さ。
10.松陰中納言…親を思いやる孝心。支え合って厳しい環境に打ち克つ親子愛。
11.兵部卿物語…主体的な判断。追い込まれながらも貫徹される強固な意志。自己実現。
12.岩屋の草子…厳しい生育環境に耐える精神力。才覚の重要性。秀でた才覚によって導かれる栄華。
13.古巣物語…厳しい環境に耐える精神力。母子の愛情。

(2)得られた成果の位置付けと今後の展望

本研究を通じて、これまであまり注目されなかった物語作品が教材化できた。特に「13.古巣物語」は、存在じたいは知られていたものの、未だ活字化されることすらなかった資料であり、本教材の個性の一つと言える。

また、それら作品と、安定教材・定番教材と言われる有名物語作品とをバランス良く併置し、さまざまな「環境」と関わって〈困難を克服する子ども物語〉という通底テーマによって結び付けたことも、本教材の特色と言えよう。

さらに、本教材には、テキストと注釈・現代語訳だけでなく、指導者が適宜日々の授業に投げ込めるよう指導例も簡潔に付した。研究の知見が、指導現場の教員に対して、具体的方法としてフィードバックされる回路が成っていることも特筆に値しよう。

本研究のような方法論、あるいは形式に則って編まれた教材は、現在のところ存在しない。したがって、本教材が多読用サイドリーダーとして活用されるようになった場合、高校や高専の指導現場において、古文との「心的距離の近い」学習者が増えることや、「環境」との関わりについての意識が高い学習者が増えることが予想される。積極的に古典の知に学ぶ姿勢の涵養にも繋がる可能性があろう。

その他、「環境」以外のテーマについても同様の方法で教材化、教育現場へのフィードバックが可能である。例えば、近年頻繁に言われる「地方」の問題について、学習者に考えさせることはできないか。「都」でなく「地方」で活躍し、その諸条件と共生する子どもの姿は、古典の物語の中にも多く描かれている。古典の知見に照らし、学習者自身の問題として、「地方」のありかたや「地方」での生き方について考えることは、「地方創生」が重視される昨今、極めて重要だと思われる。このように、様々な今日的課題に対応した教育方法論として応用が可能であり、今後の発展性が大いに見込まれるものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

①中井　賢一、浜松中納言物語の教材価値、熊本県立大学文学部紀要、第 20 巻第 73 号、2014 年、pp.87-98、査読有り

②中井　賢一、『源氏物語』明石中宮論―明石中宮の機能と権力機構としての宇治―、中古文学、第 91 号、2013 年、pp.14-28、査読有り

③中井　賢一、うつほ物語の教材価値、宇部工業高等専門学校研究報告、第 59 号、2013 年、pp.57-60、査読なし

④中井　賢一、学習者の未来と『方丈記』―「ゆく河の流れ」の指導方法―、国語教室、第 95 号、2012 年、pp.66-69、査読有り

⑤中井　賢一、落窪物語の教材価値、宇部工業高等専門学校研究報告、第 58 号、2012 年、pp.61-66、査読なし

６．研究組織

(1)研究代表者

中井　賢一（NAKAI,Kenichi）
熊本県立大学・文学部・准教授
研究者番号：９０５８０９６０